

『仏所行讚』におけるサンスクリット語与格の翻訳方式¹

大山 祐亮・張 倩倩

キーワード: 統語論 翻訳論 サンスクリット 中古中国語 与格

要旨

本論は『ブッダチャリタ』のサンスクリット原典と曇無讖の翻訳した漢訳『仏所行讚』とを対照しながら、『ブッダチャリタ』における与格の語の『仏所行讚』における漢訳方法を検討した。その結果、『仏所行讚』には、①省略する、あるいは意識される、②与格を示すための一つの文法標識が当てられる、③動詞の直接目的語として訳出する、④複合語の一部として組み込まれる、という四種類の与格の翻訳方式が存在することが判明した。

1. はじめに

インドから中国に仏教が伝来する過程で、サンスクリットで書かれた多数の仏典が中国語に翻訳された。そのため、原典と翻訳が現存する仏典に関してはサンスクリットの原文と中古中国語の翻訳を利用した言語学的研究が可能となっている。本研究では一世紀ごろのサンスクリット仏典『ブッダチャリタ (Buddhacarita)』と、その五世紀ごろの漢訳『仏所行讚』を対照して、サンスクリットにおける与格が中古中国語においてどのように翻訳されるのかという問題を検討する。

『ブッダチャリタ』は古代インドの馬鳴 (アシュヴァゴーシャ) の作とされる仏教叙事詩で、仏教の教義を織り込みつつ美文体 (カーヴィヤ) の古典サンスクリットで仏陀の一生を歌いあげた作品である。馬鳴の生没年は明らかでないが、銭 (1990: 172-174) によれば、生年が 50 年ごろ、没年が 170 年ごろの人物であると推定されている。

その漢訳である『仏所行讚』は、五胡十六国時代の北涼で活躍したインド出身の曇無讖 (385-433) によるものである。こちらも五言を基調とする韻文で歌われている。しかし、梁 (2017: 194) によれば、この作品の韻文は古楽府に通じる形式をもってはいるが、特定の韻律を用いているわけではないという。また、必ずしもサンスクリット原文の一行に対して決まった行数の漢訳が存在するわけではなく、漢訳がなされていない箇所も存在する。『ブッダチャリタ』にはこの他にチベット語訳も存在する。

『仏所行讚』は 28 編からなり、本来は原典の『ブッダチャリタ』も同様の構成であったと推定される。しかしながら、『ブッダチャリタ』は 1 篇の前半から 14 編の半ばまでのみ現存しており、冒頭の数行と後半の 14 編あまりは散逸している。したがって、本研究は

¹ 本研究の執筆にあたり、主として第 2 章の第 2 節と第 3 章は大山が担当し、第 1 章、第 2 章第 1 節および第 3 節、第 4 章は張が担当した。

サンスクリット原文と漢訳の双方が現存している部分のみを対象とする。また、サンスクリットの『ブッダチャリタ』のテキストは Johnston (1935)、漢訳の『仏所行讃』のテキストは『大正新脩大藏經』(高楠・渡辺(編) 1924-1934)の本縁部 No.192 に収録されているものに依拠した。

2. 先行研究

2.1. 仏典の翻訳が行われた時代の中古中国語

本節では、『仏所行讃』が作られた時代の中古中国語の状況について概観する。まず第一に注目されるのは、仏教の伝来によって、中国語自体と、当時の話者たちの中国語に対する認識が大きく変容しているという点である。普 (2004: 106-111) によれば、仏教に関連する用語をはじめとする多くの借用語が流入したという語彙的な面はもちろん、切韻と四声の形成のような中国語音韻学の問題や、言語自体に対する認識にもインドの文化からの影響が存在するとされる。

また、沈 (1989: 12-13) は、『仏所行讃』の翻訳が行われた五胡十六国時代の中国語では、現代中国語へとつながる複数の重要な文法的要素の変化が起こっているということを指摘している。まず第一に、「是」がコピュラ動詞の役割として用いられるようになり、文末における「也」、「矣」、「尔」、「焉」などの語気助詞²が用いられなくなった。そして、現代中国語に存在するアスペクト助詞の「着」や「了」などが出現した。さらに、構文面では、受身文が複雑化し、直接目的語を主題化する「把」構文が用いられるようになった。

さらに、董 (2002: 559) はそれに加えて、漢訳仏教の言語は特定時期(漢魏から隋唐に至るまで)に生まれた特殊の書面語であり、それまでに存在した異なる三種類の文体が混合したものであると述べている。董はその由来の第一は先秦の中原雅言(すなわち、伝統的な中国文語)、第二は漢や魏の時代の話し言葉、そして第三は「マガダ語」³とサンスクリットから借用された語彙と文体であるとしている。

これを裏付けるように、『仏本行集経』の語彙を研究した楊 (2005: 13-30) も、『仏本行集経』で用いられている語彙は口語性を持っていると指摘している。また、楊はさらに、仏典の語彙には、翻訳者個人の言語ないし文体の影響もみられると述べている。

本研究で取り扱う問題である、この時代の中国語における与格(ないしは間接目的語)の形態標示は、主に語順が担うものとされている。姜 (2011: 24-27) によれば、上古漢語においては意味役割の表し方は語順—語義制約を主としており、周辺的な表現方法として「以(～をもって)」のような前置詞を用いる方法が存在する。一つの前置詞が多くの役割を持つことも多いが、姜 (2011: 24-27) は漢魏の時代に仏典の翻訳が開始されて以降、意味役割を表す機能語の数が増加したとも述べている。

² 文末に置かれて強調などの意味を文全体に付け加える語のことを指す。

³ おそらくプラークリット諸語一般をさすものと思われる。

2.2. サンスクリットにおける与格

サンスクリット伝統文法においては、与格は基本的に受益者 (sampradāna) を表すものであるとされている (Aṣṭādhyāyī 2.3.13 “catuṛthī sampradāne”)。近代以降の研究においては、伝統文法の議論を踏まえたうえで、与格の用法は以下のように大別されている。

- ① 動作の目標や方向を表す用法 (Speijer 1886: 58–59; Delbrück 1888: 147; Whitney 1889: 95–96; Apte 1925: 43; 辻 1974: 274–275)。例えば、*upādhyāyāya gām dadāti* 「彼は師に牡牛を与える」 (辻 1974: 274)。⁴
- ② 動作の目的を表す用法 (Speijer 1886: 64–67; Delbrück 1888: 147–149; Whitney 1889: 95–96; Apte 1925: 44; 辻 1974: 276)。例えば、*puspebhyo vrajati* 「花を摘むために行く」 (辻 1974: 276)。
- ③ 「気に入る」、「熱望する」、「満足させる」といった動詞とともに用いる用法 (Speijer 1886: 58–67; Delbrück 1888: 140–145; Whitney 1889: 95–96; Apte 1925: 43–51; 辻 1974: 275)。例えば、*devadattāya rocate modakah* 「糖菓がデーヴァダッタの気に入る」 (辻 1974: 275)。
- ④ *namas* 「敬礼」のような名詞とともに用いる用法 (Delbrück 1888: 145–146; Apte 1925: 45–46; 辻 1974: 275)。例えば、*namo devebhyah* 「神々に頂礼あれ」 (辻 1974: 275)。
- ⑤ *ardhuka* や *priya* のような形容詞や、*aram* のような副詞とともに用いる用法 (Delbrück 1888: 146–147)。例えば、*brāhmanāya sārvasu dikṣv ārdhukam* 「バラモンのためにあらゆる場所で栄える」 (Delbrück 1888: 146)。
- ⑥ 利益や関与を示す用法 (Speijer 1886: 59–64; 辻 1974: 275)。例えば、*ācāryāya karma karoti* 「彼は師のために仕事をする」 (辻 1974: 275)。
- ⑦ 副詞としての用法 (Delbrück 1888: 150; 辻 1974: 277)。例えば、*cirāya* 「長い間」 (辻 1974: 277)。
- ⑧ 述語的用法 (辻 1974: 276–277)。コピュラ動詞とともに、あるいは何も動詞を伴わずに主語が帰着するところを示す。例えば、*upadravāya bhavati kopah* 「怒りは災を招く」 (辻 1974: 277)。
- ⑨ 期限を表す用法 (Speijer 1886: 67; Delbrück 1888: 149; 辻 1974: 277)。例えば、*vatsarāya nivartanīyaḥ* 「1年の終わりに連れ戻されるべきである」 (辻 1974: 277)。

また、この他に、非常に稀ながら、*me* 「私に」や *te* 「君に」のような人称代名詞の与格が虚辞として用いられる例も存在することが指摘されている (Renou 1930: 297; Edgerton 1954: 45–46)。例えば、*katham bata svapsyati so 'dya me vratī* 「嗚呼、誓いをたてているとはいえ、彼は今日どのようにして眠るのだろうか」 (Edgerton 1954: 45) という例がある。

さらに、叙事詩のサンスクリット (Epic Sanskrit) や仏典のサンスクリット (Buddhist Hybrid

⁴ 以下では、例文中の与格の語と、その与格の語に対応する日本語訳に下線を付す。これらは原文には付されていない。

Sanskrit) においては、属格の用法で用いられる与格の例が存在することが指摘されている (Edgerton 1954: 45; Oberlies 2003: 101, 104, 331-332)。例えば、Saddharmapuṇḍarīka 93.6 に *bhāṣitam agra mahyam* 「私の最上の言葉」 (Edgerton 1954: 45) という用例が存在する。

2.3. サンスクリットの与格の漢訳方法

前節までの議論を踏まえて、本節ではサンスクリットの与格をそのように中古中国語に翻訳するのかを考察する。

サンスクリットと中古中国語では、意味役割を表示する形式に大きな違いがある。例えば、前節の①の例文のように、サンスクリットでは「与える」という動詞の受益者に与格を用いるが、中古中国語では、『隋書』第 81 卷列伝 46 における「日出處天子致書日沒處天子」(日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す) という用例のように、与格に相当する表現は語順で表現されるのが最も無標な表現である。したがって、サンスクリットの仏典を中古中国語に翻訳する際には多種多様な方法が試みられている。

しかしながら、サンスクリット原文の格をどのように漢訳するのかという問題についての言語学的な研究は姜 (2011) と王 (2014) の二つのみが存在し、与格についての言及は少ない。その中でも『仏所行讚』の漢訳は、黄 (2015) による梵漢対訳の書籍が存在するものの、言語的研究自体がまだ行われていないため、『ブッダチャリタ』と『仏所行讚』との対象研究を行うことによって、漢訳仏典の翻訳論に貢献できると思われる。

『法華経』におけるサンスクリットと漢訳の対象研究を行った姜 (2011: 57) は、サンスクリットの与格に対応する漢文の文法用語として「目的格」という用語を導入している。これは動作行為の目的及び目的の原因、受益者の意味をつとめるものであり、その目的格はサンスクリットの原典では主に与格、属格及び処格 (処格絶対節を含む) で表現していると述べている。すなわち、サンスクリットの与格を目的格として翻訳するというよりはむしろ、漢文の目的格として翻訳されるもののなかにサンスクリットの与格があると述べている。そして、具体的には、目的格は前置詞「為 (～のために)」および「向 (～にむかって)」、後置詞「故 (～のゆえに)」、及びそれらを併用した「為/以... 故 (～のためだからである)」を用いて表現されていると述べている。

また、『阿毘達磨俱舍論』におけるサンスクリットと漢訳の対象研究を行った王 (2014: 87-88) は、漢訳では動作行為を受けるものを表す用法としての与格は動詞の直接目的語として訳すことが多く、動作行為の目的を表す与格は前置詞「為」を含む前置詞句として訳すことが多いと説明している。これら二つの先行研究をまとめると、サンスクリットの与格は「為 (～のために)」、「向 (～にむかって)」、「故 (～のゆえに)」、「以 (～をもって)」の四文字で訳されることがあるということになる。これを踏まえて、次章では『仏所行讚』においてはどのような訳語が当てられているのかという問題を考察する。

3. 『仏所行讚』における、サンスクリットの与格を漢訳する方策

3.1. 五失本という概念

本章では『ブッダチャリタ』の与格が曇無讖の『仏所行讚』の中で、どういう形で表すかを分析する。

『ブッダチャリタ』における与格の用例は、複数の語が同格に置かれてひとつの与格節を構成しているものをひとつとして数えると、合計で98例が存在する。しかしながら、その分析に際してまず第一に判明したのが、漢訳仏典はサンスクリット原文の構文にあまり忠実な翻訳ではないということである。『仏所行讚』の文章量が多いものの、サンスクリット原文において与格で表されている語の文中での意味役割が、漢訳においてもそのまま保たれているという事例は多くないということがわかった。

このことは漢訳が行われた時代の人々も認識していたということが、同時代の文献から判明している。例えば、中国仏教の発展に大きな役割を果たした道安(314-385)が『魔訶鉢羅若波羅蜜經抄序』において提示した「五失本」という概念が挙げられる。これについては日本では横超(1983:8-9)、中国では魏(1991:45-46)が言及しているが、横超(1983:8)はこの概念を以下のように紹介している。「五失本とは胡を訳して秦となすに五の失本ありとせられるものであって⁵、第一には翻訳すれば語の配列順序に於て、胡文と訳文とが互に逆になること。第二は胡経は質朴を旨とするが、秦人は文を好むから、訳すれば本の質を失う。第三には胡経には反復が多いが、翻訳の際には排斥される。第四には胡経には同じ内容を重ねて別な語によって表現したため一見混乱と思われるような場合があるけれども、それが大量に削除される。第五には胡経は段落の改まる毎に既述の事項を繰り返すが、翻訳の時には悉く此が除かれる。」

すなわち、五失本とは、第一に語順の変更、第二に意識、第三に反復する記述の削除、第四に重複する内容の削除、第五に章の冒頭における前章の内容の繰り返しの削除という、原文から逸脱した翻訳をする際に許容される程度を規定したものであるといえる。漢訳仏典の翻訳を考察する際には、この五失本の内容を念頭に置かなければならない。

3.2. 五失本の影響により、考察の対象外となる用例

『仏所行讚』におけるこの五失本の影響の例には、以下のようなものが挙げられる。

まず、そもそも意識や翻案を含めた漢訳文そのものが存在しない箇所が存在する。『ブッダチャリタ』における与格の語が存在する偈のうち、これに該当するのは2.51、8.48、8.58、8.66、11.48、13.50、13.53節の7例である。

次に、第二の失本に起因すると思われるもの、すなわち、漢訳の内容がサンスクリット原文の内容と対応しておらず、全体として別の文章となっているものが存在する。『ブッダチャリタ』における与格の語が存在する偈のうち、これに該当するのは1.73、1.84、5.23、

⁵ ここでは「胡」はサンスクリット、「秦」は当時の中古中国語を指す。

6.61、11.26 節の 5 例である。例えば 1.84 節では、『ブッダチャリタ』原文は以下のようである。

- (1a) 原文 *api ca śatasahasrapūmasaṃkhyāḥ sthirabalavattanayāḥ sahemasīṅgīḥ /
anupagatajarāḥ payasvinīr gāḥ svayam adadāt sutavrddhaye⁶ dvijebhyaḥ // 1.84 //*
梵文和訳 彼はまた、息子の(つつがなき)成長(を期せん)がために、自ら親しくバラ
モンたちに、百・千の数をも満たす牝牛を賜った。この牛の群れはそれぞれ若々
しく、ふんだんに乳を出し、丈夫で強そうな仔牛を連れ、またその角には黄金
がつけられていた。(原 1980: 32)

これに対して、『仏所行讚』の漢訳は以下のようになっている。

- (1b) 漢訳 沙門婆羅門 呪願祈吉福
嚧施諸群臣 及國中貧乏
村城姝女眾 牛馬象財錢
各隨彼所須 一切皆給與
漢文和訳 沙門や婆羅門たちはまじないをして吉福を祈った。
群臣にお布施をほどこして、國中の貧乏人に及ばせた。
村や町の女官たちには、牛、馬、象、財宝、金銭を、
それぞれの必要とするだけ、すべて与えた。(筆者訳)

この例では、*sutavrddhaye* 「息子の成長のために」、および *dvijebhyaḥ* 「バラモンたちに」という二つの語が与格で現れているが、前者は訳出されておらず、後者は漢訳では主語へと変化している。

また、同じく第二の失本に起因すると思われるものに、漢訳が意識であるために原文の与格の痕跡が存在しないものが存在する。『ブッダチャリタ』における与格の語が存在する偈のうち、これに該当するのは 1.64、1.72、2.14、2.26、2.53、5.20、6.12、8.34、9.37、9.77、10.10、11.35、11.37、11.38、11.68、12.59、13.5 節の 15 例である。例えば 2.14 節では、『ブッダチャリタ』原文は以下のようになっている。

- (2a) 原文 *kulāt tato 'smai sthiraśīlayuktāt sādhvīm vapur hrīvinayopapannām /
yaśodharāṃ nāma yaśoviśālāṃ vāmābhidhānaṃ śriyam ājuhāva // 2.26 //*
梵文和訳 そこで、王は息子のために、きちんとしたお家柄から、容姿端麗にして廉恥
を重んじ、よくしつけられたたいへんに評判のよいヤショーダラーという名前

⁶ 以下でも 2.2 節と同様に、原文中の与格の語と、それに対応する梵文和訳、漢文、漢文和訳のそれぞれに下線を付す。

の、よいお嬢さんを、「美女」と名付ける幸福の女神として迎えたのであった。
(原 1980: 40)

これに対して、『仏所行讃』の翻訳文は以下のようになっている。

(2b) 漢訳 廣訪名豪族 風教禮義門
容姿端正女 名耶輪陀羅
應娉太子妃 誘導留其心

漢文和訳 教育と礼儀のいきとどいた名家の豪族を広く尋ねて、
耶輪陀羅という名の容姿端麗な娘を、
妃として娶らせ、彼の心をとどめようとした。(筆者訳)

以上の二つの文章は、内容的にはほぼ一致するものであるが、サンスクリット原文における *asmai ājuhāva* 「彼（仏陀）のために妃に迎えた」という語結合が、漢訳では「留其心（彼の心をとどめようとした）」という語結合に変化してしまっている。したがって、サンスクリット原文の与格の痕跡は漢訳では消滅してしまっている。

そして、第三の失本、第四の失本、そして第五の失本に起因すると思われるものとして、原文と対応した漢訳が存在するにもかかわらず、与格の語が訳出されていない箇所が存在する。『ブッダチャリタ』における与格の語が存在する偈のうち、これに該当するのは 1.16、1.48、1.80、1.84、2.18、2.21、2.36、2.42、2.53、3.29、3.32、3.50、4.2、5.17、5.19、5.28、5.35、5.85、6.14、7.13、8.17、8.79、11.18、11.64、12.101、12.119、13.26、13.36、13.67、14.17 節の 30 例である。例えば 1.16 節では、サンスクリット原文は以下の通りである。

(3) 原文 *khāt prasrute candramarīcīsubhre dve vāridhāre śīśiroṣṇavīrye /*

śārīrasaṃsparśasukhāntarāya anuttarasya nipetatur mūrdhani tasya saumye // 1.16 //

梵文和訳 すると天から、月の光のように清らかな二条の、寒・暖の二力をそなえた雨が
流れ出でて、彼の体に触れる幸せを得ようとばかりに、その美しい頭の上に落
ちてきた。(原 1980: 12)

それに対して、漢訳は以下のようになっている。

(3') 漢訳 應時虛空中 淨水雙流下
一溫一清涼 灌頂令身樂

漢文和訳 その時虚空から、二つの清い水が流れ落ちてきた。
一つは暖かく、一つは清涼で、頭にふりそそぎ、その身を楽します。(筆者訳)

この例では、サンスクリット原文で与格で現れている *śarīrasaṃsparsasukhāntara* 「彼の体に触れる幸せ」に相当する訳語が『仏所行讚』に存在せず、抜け落ちてしまっている。以上に挙げたような「五失本」に該当する用例は、98 例中 57 例という与格の用例の過半数を占めている。これらの例は仏典の内容をどのように翻訳するのかという翻訳方法の問題を検討する際には用いることが可能であると思われる。しかし、本稿のような、サンスクリットの与格が漢訳でどのような語として翻訳されているのかという問題を考察する上では用いることができない。したがって、与格の翻訳方式を検討する際に依拠できるのは残りの 41 例のみである。

3.3. サンスクリットの与格に対応して、何らかの文字が訳語として当てられている用例

本節では、サンスクリットの与格に対応した訳語が存在する場合を取り扱う。

訳語が存在するという用例は、さらに二つの場合に分類することができる。まず第一に、サンスクリットの与格に対応するような文法標識のみが翻訳され、名詞自体が省略されるものが 4 例存在する。日本語で例えれば、「その事実に対して、こちらでは」という表現を、「対して、こちらでは」と翻訳しているような場合である。具体的には、「對（対）」が用いられるものが 2 例（3.56、3.59 節）、「用」が用いられるものが 1 例（11.47 節）、「上」が用いられるものが 1 例（10.16 節）存在する。

「對」が用いられているのは以下の例である。

(4) 原文 *tataḥ sa śuddhātmabhir eva devaiḥ śuddhādhivāsair abhībhūtacetāḥ / avācyam apy artham imaṃ niyantā pravṛyājahārāthavadiśvarāya // 3.56 //*

梵文和訳 すると、御者は、その心が例の本性清浄なるシュッダアディヴァーサ神たちに憑かれていたため、言っではならなかった事柄をありのままに主人に語ってしまった。(原 1980: 64)

漢訳 天神教御者 對曰為死人

漢文和訳 天神は御者に教えた。[御者は]答えて言うには、死人であると。(筆者訳)

この例では原文中で与格で現れている *arthavadiśvara-* 「主人」が訳出されていない。そのかわりに、「對（答えて）」という語だけが用いられて、答える行為の対象が存在していることを示唆している。

「用」が用いられているのは以下の例である。

(5) 原文 *yadā ca jītvāpi mahīm samagrām vāsāya dṛṣṭam puram ekam eva / tatrāpi caikaṃ bhavanaṃ niṣevyaṃ śramaḥ parārthe nanu rājabhāvaḥ // 11.47 //*

梵文和訳 また、たとえ全大地を征服したとしても、住むことができるのは（そのなかの）ただ一つの都だけであることは火を見るより明らかであり、さらにその都のな

かでもただ一つの邸にしか (ほんとうに) 住むことはできません。ともかく王であるということは、他人のために労をとることではないのです。(原 1980: 229)

漢訳 雖王四天下 用皆不過一
營求於萬事 唐苦何益身
未若止貪求 息事為大安

漢文和訳 四天下の王であっても、用いるものはただ一つに過ぎない。
万事を営み求め、いたずらに苦しんで自分の身に何の利益があるのか。
貪り求めるのをやめることには及ばず、無事息災を大安とする。(筆者訳)

この例でも同様に、原文中で与格で現れている *vāsa-*「住むこと」に相当する単語が省略されて、そのかわりに、「用 (用いるのは)」という語だけが用いられている。

「上」が用いられているのは以下の例である。

(6) 原文 *tatrainam ālokyā sa rājabhṛtyaḥ śrenyāya rājñe kathayāṃ cakāra /*
saṃśrutya rājā sa ca bāhumānyāt tatra pratasthe nibhṛtānyātraḥ // 10.16 //

梵文和訳 かの王の従者は彼をその場で見とどけてから、(帰って) シュレーニャ王に報告した。かの王はその一部始終に聞き入り、なんともおそれ多いことだと尊崇の念禁じがたきまま、つましい鹵簿を伴って、そこに向かって出発した。(原 1980: 206)

漢訳 使見安住彼 次第具上聞
王聞心馳敬 即勅嚴駕行

漢文和訳 使者は、そこに安住しているのを見て、王に逐一詳しく申し上げた。
王は聞いて心中に尊敬の念を生じ、すぐに従者を伴って行った。(筆者訳)

この例では与格の *śrenyāya rājñe*「シュレーニャ王に」が訳出されていない。そのかわりに、「上 (目上の人に対する動作を示す)」を用いて敬語表現とすることで、話をする相手がシュレーニャ王であることを示唆している。以上のような例が、文法標識のみが翻訳され、名詞自体が省略される例である。

次に、サンスクリット原文の与格を何らかの文法標識と名詞の組み合わせとして翻訳しているものがある。『仏所行讃』においては、サンスクリットの与格を表す文法標識となりうる字は「為」、「以」、「於」、「令」、「成」、「向」、「見」、「付」、「故」という 9 字が観察された。以下ではそれぞれの字が用いられている用例を示す。

(i) 為「～のために」(1.15、2.14、2.28、4.63、5.78、6.18 節の 6 例)

- (7) 原文 *bodhāya jāto 'smi jagaddhitārtham antyā bhavotpattir iyaṃ mameti /
caturdiśaṃ siṃhagatir vilokya vāṇīm ca bhavyārthakarīm uvāca // 1.15 //*
- 梵文和訳 そして、この獅子のたたずまいなすものは四方を見渡して、「われこそはさと
りを開くため、ひいては人の世を利益せんために生まれきたったものである。
そして、私の輪廻の世界における生起はこれが最後である」と宣言して、彼が
将来なすべき、またなしうる、慶賀すべき約束事を予示する言辞を吐いた。(原
1980: 11)
- 漢訳 獸王師子歩 觀察於四方
通達真實義 堪能如是說
此生為佛生 則為後邊生
我唯此一生 當度於一切
- 漢文和訳 獸王師子のように歩み、四方を觀察する。
真実の義に通達し、このようなことを説くことができる。
この生を仏生となす、即ち最後の生となす。
わたしはただこの一生で一切を救うだろう。(筆者訳)
- この例においては、*bodhāya*「さとりの開くため」が漢文においては「為佛生」と訳され
ており、「為」が与格のマーカールの役割を果たしていると考えられる。

(ii) 於「～において」(1.59、1.83、5.18 節の3例)

- (8) 原文 *ity etad evaṃ vacanaṃ niśamya prahaṛṣasambhṛāntagatir narendraḥ /
ādāya dhātryaṅkatam kumāraṃ saṃdarśayām āsa tapodhanāya // 1.59 //*
- 梵文和訳 と、このような彼のことばを聞くと、王は悦びに相好をくずし、うれしさに足
どりもあたふたと、乳母の横腹にかかえられている王子を連れてきて、行者に
見せた。(原 1980: 24)
- 漢訳 王聞仙人說 決定離疑網
命持太子出 以示於仙人
- 漢文和訳 王は仙人の説くのを聞き、決定して疑網を離れ、
命じて太子を持ち出させ、そして仙人に示した。(筆者訳)
- この例においては、サンスクリット原文の *saṃdarśayām āsa tapodhanāya*「行者に見せた」
という表現が「於仙人」と漢訳されている。この「於」が与格マーカールとして用いられて
いる。

(iii) 以「～をもって」(5.38 節の1例)

- (9) 原文 *jagataś ca yadā dhruvo viyogo nanu dharmāya varam svayaṃvivyogaḥ /*

avaśaṃ nanu viprayojayen mām akṛtasvārtham atrptam eva mṛtyuḥ // 5.38 //

梵文和訳 この世に別離が定まっているとすれば、この理法のため、むしろ自分のほうから別離を敢行してしまうほうがよいとお思いになりませぬか。死はいやおうなしに私を、自分のしたいことをなしとげる以前にでも、満ち足りない状態のままで、引き離すことができますもの[。] (原 1980: 101)

漢訳 分析為常理 孰能不聽求
脱當自磨滅 不如以法離
若不以法離 死至孰能持

漢文和訳 分析して常の理としたことを、誰か求めるのを許さずにいれるだろうか。のがれて自ら磨滅してしまうとしても、法を以て離れるのには及ばない。もし法を以て離れなければ、死が至ったとき、誰が命を保つことができるだろうか。(筆者訳)

この例におけるサンスクリット語 *dharmā-*「法」の与格 *dharmāya* は「法のために」の意味であるが、漢文では「以法」と翻訳されている。この「以」も与格のマーカールの役割を果たしていると考えられる。

(iv) 成「～をなす」(1.18、1.57、12.115、13.1 節の 4 例)

(10) 原文 prayojanaṃ yat tu mamopayāne tan me śṛṇu pṛītim upehi ca tvam /
divyā mayāditya pathe śrūtā vāg bodhāya jātas tanayas taveti // 1.57 //

梵文和訳 しかし(それはともかくとして)あなたは私が出向いてまいった動機を私からお聞きください。そして、お悦びなされよ、虚空に天の声あり、私はあなたのところにさとりにいたる(べき)ご息がご誕生あったと聞いたのであります。(原 1980: 22)

漢訳 汝當聽我說 今者來因緣
我從日道來 聞空中天說
言王生太子 當成正覺道

漢文和訳 王よ聴け。私が今やって来た因縁を説こう。
私が日が導くのに従って来ると、空中に天の説く声を聞いた。
言うには、王に太子が生まれた。必ず正覺道をなすだろうと。(筆者訳)

この例における *bodhāya*「さとりに至る」は、1.2 節で紹介したサンスクリットの与格の用法のうち、⑧の述語的用法として用いられている。この語に対して「成正覺道」という漢訳が当てられているが、「正覺道」が *bodha-*「さとり」の名詞語幹を翻訳したものだと思われる。すなわち、帰着するという意味を「成(なす)」でおきかえたうえで、与格の一語を

一つの動詞構文として訳し直している。

(v) 令「～せしめる」 (2.35 節、13.34 節の 2 例)

(11) 原文 nādhyaiṣṭa duḥkhāya parasya vidyāṃ jñānaṃ śivam yat tu tad adhyagīṣṭa /
svābhyah prajābhyo hi yathā tathaiṣa sarvaprajābhyah śivam āśaṣamse // 2.35 //

梵文和訳 彼は他人を苦しめるような呪法を学ばず、むしろ他人のためになる知識を身につけた。彼はあたかも自分の子孫たちに対するごとく、一切人民のためになることを願ったからである。(原 1980: 42–43)

漢訳 宣化諸外道 斷諸謀逆術
教學濟世方 萬民得安樂
如令我子安 萬民亦如是

漢文和訳 諸外道に宣伝し、諸の謀逆の術を断ち、
社会の救済の方法を教えて学ばせ、万民は安樂を得る。
我が子を安らかにするように、万民をも同様にした。(筆者訳)

この部分は複文となっているが、問題となる *svābhyah prajābhyo* 「自分の子孫のため」の直後には、主文中の *śivam āśaṣamse* 「恩寵あることを望んだ」が省略されている。漢文ではこの主文中の二語を補ったうえで、*svābhyah prajābhyo* に「令我子」という訳語を当てている。この訳文は、「令」を与格のマーカーとして訳出し、そのうえで「令我子安」という使役構文を形成しているように思われる。

(vi) 向「～に向かって」(1.80、7.44 節の 2 例)

(12) 原文 atha munir asito nivedya tattvaṃ sutaniyataṃ sutaviklavāya rājñe /
sabahumatam udīkṣyamāṇarūpaḥ pavanapathena yathāgataṃ jagāma // 1.80 //

梵文和訳 そこで、聖者アシタは、息子のことを案じていたこの王に、この息子に定まっていることの仔細を告げてから、その姿を（人々に）恭しく仰ぎ見られつつ、天を駆って、きた道を帰っていったのであった。(原 1980: 31)

漢訳 爾時彼仙人 向王真實說
必如王所慮 當成正覺道
於王眷屬中 安慰眾心已
自以己神力 騰虛而遠逝

漢文和訳 その時仙人は王に向かって真実を説いた。
必ず王が慮るように正覚の道を成就するだろうと。
[仙人は]王と眷属たちの中で、皆の心を安慰すると、

自らの神力で、虚空に駆け上がり、遠くに行った。(筆者訳)

この例の中に *sutaviklavāya rājñe* という二つの与格があるが、*sutaviklavāya* は「息子を心配するの意味で、*rājñe*「王」を修飾している。また、漢訳の「向王」という表現は *sutaviklavāya* 「息子を心配する」を省略したうえで、「向」を与格マーカーとして訳出している。

(vii) 見「～を見て」(2.40 節の 1 例)

(13) 原文 *āsāvate cābhigatāya sadyo deyāmbubhis tarṣam acechidiṣṭa /*

yuddhād ṛte vṛttaparaśvadhena dviḍḍarpam udvṛttam abebhidiṣṭa // 2.40 //

梵文和訳 つねに彼は乞い求めてくるものに対し、直ちに贈り物の(洪)水をもってその渴きを断ってやった。また敵の道ならぬ驕慢を、道を踏みいくという斧によって打ち砕くをつねとし、かつて戦争によることをしなかった。(原 1980: 44)

漢訳 見彼多求眾 豊施過其望
心無戦争想 以德降怨敵

漢文和訳 かの地にものを求める多くの人々を見ると、豊かに施してその望みを上回り、心に戦争への思いがなく、徳をもって怨敵を降した。(筆者訳)

この例における与格は *āsāvate* 「望んでいる」と *abhigatāya* 「近づいた」である。漢訳では、「見」という動詞を用いて、原典で与格の *āsāvate cābhigatāya* を「多求眾」と訳している。したがって、「見」がサンスクリット原文の与格を翻訳した標識であると考えられる。

(viii) 付「～にふす」(12.7 節の 1 例)

(14) 原文 *nāścaryaṃ jīṛṇavayaso yaj jagmuḥ pārthivā vanam /*

apatyebhyaḥ śriyaṃ dattvā bhuktocchiṣṭām iva srajaṃ // 12.7 //

梵文和訳 お年を召した王たちが、ご子孫に世俗の栄華(王位)を、あたかも使い古して捨てた花輪のように譲与して、森にこられるということはけっして不思議なことではありません。(原 1980: 239)

漢訳 古昔明勝王 捨位付其子
如人佩花鬘 朽故而棄捨

漢文和訳 昔の賢く優れた王たちはが位を捨ててその子に譲る。

人が花飾りを身に纏い、朽ちてしまったので捨てるのと同様である。(筆者訳)

サンスクリット原文の *apatyebhyaḥ* 「子孫たちに」の漢訳は付其子「その子に与える」となる。一見すると、「付」は *dattvā* 「与えてから」の訳語であるように思われるが、*dattvā* には「捨」という訳語が与えられている。この漢訳はまず *śriyaṃ dattvā* 「栄華を与える」を

「捨位」と訳出し、その後で結果補語として「付其子」を付け加えている。したがって、「付」はサンスクリット原文の与格の受益者の意味を訳出したものであるといえる。

(ix) 故「～のゆえに」(1.20 節の 1 例)

(15) 原文 *tathāgatotpādaguṇena tuṣṭāḥ śuddhādhivāsās ca viśuddhasattvāḥ /
devā nanandur vigate 'pi rāge magnasya duḥkhe jagato hitāya // 1.20 //*

梵文和訳 その本性清浄なるシュツダアディヴァーサ神群は、「(このようにして) 如来世に出たもうた」という福德に満足し、すでに(喜怒哀楽の) 情を去った身ではあったが、苦(海)に沈淪している人の世の利益のために、(その誕生を) 喜んだのであった。(原 1980: 13)

漢訳 如来出興世 淨居天歡喜
已除愛欲歡 爲法而欣悦
衆生沒苦海 令得解脱故

漢文和訳 如来が世に出て興れば、淨居天は歡喜する。
[淨居天は]すでに愛欲の欲びを取り除いたが、法のために喜ぶ。
苦海に沈む衆生を解脱させられるから。(筆者訳)

姜 (2011: 57) で紹介されている「故」を用いる翻訳方法と思しき例が上の 1.20 節である。この例においては、*hitāya* 「利益のために」という一語に対して、その名詞自体の語彙的な意味を表すと思われる「令得解脱 (解脱させる)」という動詞句と、与格の文法的な役割を表す「故」という一文字という二つの翻訳が当てられているように思われる。すなわち、日本語で例えるならば、「利益のために」という表現を、「利益」と「のために」の二つの部分に分けてそれぞれに訳語を与えているような状況である。

3.4. 与格の語が動詞の直接目的語として訳出される用例

姜 (2011: 57) と王 (2014: 87–88) の双方が言及している、与格が直接目的語として訳出されている用例は、『仏所行讚』においても少なくない (1.86、3.2、3.49、6.17、7.48(2×)、9.53、11.42(2×)、11.51、11.53、11.64、12.55 の 13 例)。例えば以下のような例がある。

(16) 原文 *śrutvā tataḥ strījanavallabhānām manojñabhāvaṃ purakānanānām /
bahihprayānāya cakāra buddhim antargṛhe nāga ivāvaruddhaḥ // 3.2 //*

梵文和訳 婦人たちがこよなく賞でる、都の森の心躍らす愉しさを耳にすると、彼はあたかも家のなかに閉じこめられていた象のように (なんとしてでも) 外へ出てみたいと考えた。(原 1980: 50)

漢訳 太子聞音樂 歎美彼園林

内懐甚踊悦 思樂出遊觀

猶如繫狂象 常慕閑曠野

漢文和訳 太子は音楽を聞く。[音楽は]その園林の美しさを歎じる。
[太子は]心に甚だしい悦びを抱き、遊觀に出かけたいと思った。
狂象が常に静かな広野を慕い繋がるように。(筆者訳)

この例においては、*bahihprayānāya cakāra buddhim*「外に出ることを決心した」というサンスクリット原文が、「思樂出遊觀」という他動詞文として訳されている。その際に *bahihprayānāya*「外に出ることに」という与格の語が「出遊觀」という直接目的語へと変化している。

3.5. その他の用例

上に挙げた例以外の翻訳方法としては、与格の語を複合語の一部として組みこんで翻訳している例(2.35節の1例)が存在する。

複合語の一部に組み込む例は以下のものである。⁷

(17) 原文 *nādhyaiṣṭa dukkhāya parasya vidyāṃ jñānaṃ śivam yat tu tad adhyagīṣṭa / svābhyah prajābhyo hi yathā tathaiiva sarvaprajābhyah śivam āśaśamse // 2.35 //*

梵文和訳 彼は他人を苦しめるような呪法を学ばず、むしろ他人のためになる知識を身につけた。彼はあたかも自分の子孫たちに対するごとく、一切人民のためになることを願ったからである。(原 1980: 43)

漢訳 宣化諸外道 斷諸謀逆術
教學濟世方 萬民得安樂
如令我子安 萬民亦如是

漢文和訳 諸外道に宣伝し、諸の謀逆の術を断ち、
社会の救済の方法を教えて学ばせ、万民は安樂を得る。
我が子を安らかにするように、万民をも同様にした。(筆者訳)

この例においては、原文の *dukkhāya parasya vidyāṃ*「他人に対して苦しみをもたらず呪法」という三語からなる名詞節を、「謀逆術」という一語にして訳出している。

⁷ 後半部分に含まれる三つの与格の語に関しては、前半の *svābhyah prajābhyo*「自らの子孫たちに」については3.3節(ix)において「故」を用いる例として紹介した。一方で後半の *sarpaprajābhyah*「すべての生類に」は、「萬民亦如是(万民もまたこのようである)」と訳出されている。これは五失本を紹介する際に述べた、意識されて与格の痕跡が残っていない用例にあたる。

4. 結論

本研究では、『ブッダチャリタ』原文のサンスクリット語の与格を中古中国語の『仏所行讃』へと翻訳するためにはどのような方法を用いるのかという問題を検討した。その結果、『ブッダチャリタ』における与格は、『仏所行讃』において大きく分けて五種類の方法で漢訳されているということがわかった。まず第一の方法として、読者の円滑な理解のために省略される、あるいは意識されるというものがある。この方法をとったものは 98 例中 59 例である。これは与格の語を与格として翻訳することを放棄したものであるため、言語学的なサンスクリットと中古中国語の対照研究には用いることが難しいが、漢訳の方法としては最も大きな割合を占めている。これにより、仏典漢訳の際における「五失本」の影響の大きさを垣間見ることができる。

それに次ぐ第二の方法としては、与格を示すために一つの文字が当てられているものが挙げられる。この方法をとったものは 25 例存在する。これらの用例はさらに二つの類に分けることができる。一つ目の類は、与格マーカーのみが訳出されて、名詞自体は省略されるものである (4 例)。これについては、「對 (対)」、「用」、「上」という三つのマーカーが使われている例が存在する。二つ目の類は、何らかの文法標識と名詞の組み合わせの形となるものである (21 例)。これについて『ブッダチャリタ』では「為」(6 例)、「於」(3 例)、「以」(1 例)、「成」(4 例)、「令」(2 例)、「向」(2 例)、「見」(1 例)、「付」(1 例)、「故」(1 例) という九種類の文字が与格を翻訳する文法標識として用いられている。このうち、「於」、「令」、「成」、「見」、「付」の五文字は本研究で初めて訳語として用いられていることが明らかとなったものである。

そして、第三の方法は、与格の語を直接目的語として訳出するというものである。この方法をとったものは 13 例存在する。

最後に、与格の語が複合語の一部として組み込まれるという第四の方法が存在する。これは用例が一つのみ存在する。

今後の課題としては、大きく二つのことが挙げられる。一つ目は、『仏所行讃』以外の仏典では、与格はどのように漢訳されているのかという問題である。漢訳の訳者や時代によって傾向の違いは存在するのかという点が焦点となる。また、本研究では漢訳でどのような文字が当てられているかということのみを対象としたが、それぞれの文字が文中でどのような役割を果たしているのかという中古中国語自体の文法の解析も行う必要がある。

二つ目は、これらの漢訳の方法と、サンスクリットにおける与格がどのような用法で用いられているのかということに相関関係があるのかという問題である。そもそも与格を訳出しない例が多数存在するなど、『仏所行讃』のみを対象にした場合には用例が不足していると思われるため、第一に挙げた他の仏典の研究を行ったうえで改めて考察する必要があるように思われる。

参考文献

- Apte, Vaman Shivaram (1925) *The student's guide to Sanskrit composition: being a treatise on Sanskrit syntax, for the use of schools and colleges*. 9th edition. Girgaon, Bombay: The standard publishing company.
- Delbrück, Berthold (1888) *Altindische Syntax*. Halle: Waisenhauses.
- 董琨 (2002) 「同经异译」与佛经语言特点管窥『中国语文』2002年06期: 559-576.
- Edegerton, Franklin (1954) *Buddhist hybrid Sanskrit grammar*. New Haven: Yale University Press.
- 原実 (1980) 『ブツダ・チャリタ』新訂版, 東京: 中央公論社.
- 黄宝生 (2015) 『梵汉对勘「佛所行讚」』北京: 中国社会科学出版社.
- 姜南 (2011) 『基于梵汉对勘的「法华经」语法研究』北京: 商务印书馆.
- Johnston, Edward Hamilton (1935) *Aśvaghōṣa's Buddhacarita: or, Acts of the Buddha*. Part I: Sanskrit text. Calcutta: Baptist Mission Press.
- 梁启超 (2017) 「翻译文学与文典」『佛学研究十八篇』北京: 商务印书馆.
- Oberlies, Thomas (2003) *A Grammar of Epic Sanskrit*, Berlin & New York: Walter de Gruyter.
- 普惠 (2004) 「天竺佛教语言及其对中国语言学的影响」『人文杂志』2004年01期: 106-111.
- 钱文忠 (1990) 「试论马鸣『佛本行经』」『中国社会科学』1990年01期: 172-185.
- Renou, Louis (1930) *Grammaire Sanscrite*. Paris: Librairie d'Amérique et d'Orient, Adrien-Maisonneuve.
- 沈锡伦 (1989) 「从魏晋以后汉语句式的变化看佛教文化的影响」『汉语学习』1989年03期: 12-14.
- Speijer, Jacob Samuel (1886) *Sanskrit Syntax*. Leiden: Brill.
- 高楠順次郎・渡辺海旭 (編) (1924-1934) 『大正新脩大藏經』東京: 大正新脩大藏經刊行会.
- 辻直四郎 (1974) 『サンスクリット文法』東京: 岩波書店.
- 王继红 (2014) 『基于梵汉对勘的「阿毗达磨俱舍论」语法研究』上海: 中西书局.
- 魏承思 (1991) 「中国佛经翻译理论概观」『佛教文化』1991年03期: 44-47.
- Whitney, William Dwight (1889) *Sanskrit Grammar*, London: Oxford University Press.
- 杨会永 (2005) 「『佛本行集经』词汇研究」博士論文, 浙江大学.
- 横超慧日 (1983) 「仏教經典の漢訳に関する諸問題」『東洋学術研究』22(2): 1-12.

Means for Translating Sanskrit Dative in *Fo suo xing zan*

ŌYAMA Yūsuke & ZHANG Qianqian

Keywords: syntax, translation, Sanskrit, Middle Chinese, dative case

Abstract

This paper addresses with the question of how words in the dative case in Aśvaghōṣa's *Buddhacarita* are translated into Middle Chinese *Fo suo xing zan*. The means for translating Sanskrit dative in *Fo suo xing zan* can be classified into five categories. First, the word in the dative case is often omitted in the translation. Second, adverbs such as *wèi* 'for' is used to indicate the meaning of the dative. Third, the word which is an indirect object in the original Sanskrit text is translated as a direct object of the verb of the sentence. Finally, the word is embedded as an element of a compound word.

(おおやま・ゆうすけ, ちょう・せいせい 東京大学大学院人文社会系研究科)